

聖書：ローマ 13：8～10

説教題：愛の負債

日時：2016年6月26日（朝拝）

パウロは今日の箇所で、「だれに対しても、何の借りもあってはいけません。」と語っています。これはクリスチャンは一切貸し借りは禁止ということでしょうか。もちろんそうではありません。聖書は正当な貸し借りを認めています。イエス様も山上の説教で「求める者には与え、借りようとする者は断らないようにしなさい。」と言われました。ルカの福音書では「返してもらうことを考えずに貸しなさい。」とまで言われています。では今日の御言葉は何を語っているのでしょうか。この箇所のキーワードになりますが、8節の「借りる」という言葉は、7節で「義務」と訳された言葉と同じものです。パウロは前回の1～7節で、この世の支配者に対する義務を果たすように、特に税をきちんと納めるようにと言いました。それと同じ言葉がこの8節で使われています。すなわちこの8節が述べていることは、義務を果たさない状態でいてはならないということです。きちんと約束を交わした上で何かを借りることは問題ありません。困った時にお金を一時的に借りることがあっても良い。読みたい本や聞きたいCDをある期間を定めて正当に借りることはあり得ます。しかし期限が来たら速やかに返すという義務を果たさない状態にしてはならない。借りるということは本来は責任が生じる重い事柄ですが、一方ではある意味でとても都合が良いことです。何と言っても、一時的には言え、ただでそれを手にすることができます。まるで自分のもののように使えます。これは便利です。しかしそうした状態に慣れてしまっ、て、ついつい返すのが遅くなるとどうでしょうか。相手は非常に悩むのです。本当にあの人は返してくれるのか。返すつもりがあるのだろうか。それは今どんな状態にあるのだろうか。果たして大切に扱ってくれているのだろうか。もちろん様々な事情があつて、予定より長くお借りしたいという時もあります。その時は相手にそのことをお願いし、了承を得るなら、常識的な範囲内では問題ありません。しかしそういったこともせず、ただ借りっぱなしの状態を放置することは盗みと紙一重です。人のものを着用していることです。それは相手に不安と不信の苦悩を与え、親しい交わりを破壊します。そしてそれは証にならないことです。ですから私たちは自分の生活を点検すべきでしょう。約束の期間が過ぎたのにうやむやにしていること、放置したまま自分の手もとにおいてある物、義務を果たしていないことはないでしょうか。クリスチャンはこのようにすることに無頓着であつてはならないのです。兄

弟姉妹なんだから、そんなに細かいことは言わないで、と都合よく甘えるのがクリスチャンではありません。物事にルーズなのがクリスチャンではありません。むしろこういうことには一般の人以上に敏感でなくてはならないのです。

さて、今述べたことはとても大切な原則であり、私たちがしっかり心に留めて実践すべきことですが、パウロは続けて面白い言い方をしています。すなわち、「ただし、互いに愛し合うことについては別です」と。私たちは誰に対しても借りがない状態に自分があるように心がけなければなりません、そこには一つの例外がある。それは互いに愛し合うことである、と。つまりこの意味は、私たちは他人を愛することにおいていつも負債を負っている者であると自分を考えなければならないということです。そしてその人に愛を返すように歩むけれども、いつになっても十分にそれを果たし終えたと言える日はやって来ないものとして理解する。つまり私には私の隣人を愛する恒久的な義務があると受け止めることです。他には何も負債を負っていないが、愛だけはいつもすべての人に負っていると考え、行動する。これは非常に含蓄ある表現ではないでしょうか。

ではなぜ私たちはそう考えるべきなのでしょう。この「負債」という言葉で思い起こすのは、この手紙の1章14節の言葉です。「私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならない負債を負っています。」パウロの基本にあるのはまず神に対する深い感謝です。こんな罪深い自分のために神は御子イエス・キリストという尊い代価を払って自分を買い取ってくださった。この時点で自分とはとてつもない負債を神に対して負っている者であるとの意識が彼にはありました。しかしなぜパウロは「神に」でなく「人に」負債を負っているという言い方をしたのでしょうか。それはこの恵み深い神に応える方法は人々に福音を伝えることだと知ったからです。そこでパウロはすべての人に私は返さなければならない負債を負っていると告白して、福音宣教に励んだのです。

この考え方は今日の箇所でも同じと言えます。私たちは神が与えてくださった救いを心から感謝します。この神に応える生活をして行きたいと願います。しかし神は私たちがただ直接的に神を愛するだけでなく、神が愛している人々を愛するようにと求めておられます。神への愛や感謝は、私たちの目の前にいる人々を愛する生活に現わし、告白するようにと求められています。従って私たちはその人々に愛の負債を負っている者で

あると考えなければならない。いつも周りの人々を見て、自分はその人々に愛を返さなくてはならないと考える。そのように周りの人々を見て、接して行くのがクリスチャンであるということです。それが神に喜ばれる礼拝生活、応答の生活であると言われているのです。

パウロはこのことを、今日の箇所では律法との関係で論じています。律法とは何でしょうか。律法とは、私たち人間が歩むべき道について神が示された御心です。私たちの生活の基準です。しかし罪に落ちた私たちはこれを完全に守り行なうことができません。生まれながらの私たちは、律法によっては断罪されるだけです。しかし8章4節に「御霊に従って歩む私たちの中に、律法の要求が全うされるため」という言葉がありました。私たちは生まれながらの状態では律法を守ることができませんが、イエス・キリストを信じてキリストと結ばれている者として、御霊による新しい力によって律法の要求を満たして行く者となると言われました。御霊によって救いの道を歩む私たちは、律法を守り行なう生活をして行く。ですから救いの恵みをいただいた私たちにとって律法は私たちの聖化の歩みのための規範であり、目標なのです。

その律法との関係についてパウロはここで「他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです」と言っています。この御言葉から二つのことを考えたいと思います。一つは律法のエッセンスは愛であるということです。律法とは単なる細かい規則、冷たいルール、無味乾燥な文字ではありません。9節でパウロはこう言います。「『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな。』という戒め、またほかにどんな戒めがあっても、それらは『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』ということばの中に要約されているからです。」 これを読むと私たちはイエス様の言葉を思い起こします。律法の専門家がイエス様のところに来て、「律法の中で一番大切な戒めはどれですか。」と質問した時に、イエス様は「心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。」という第一の戒めとともに「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。」という第二の戒めも大切だ、と言われました。律法全体をまとめると、それはこの「神を愛せよ」と「人を愛せよ」の二つになり、そのエッセンスは「愛」であることをイエス様は明確に示されました。ですから私たちは聖書の様々な戒めを心に留めて、それを実践する際、それによって愛が現わされているのでないなら、的が外れているということです。律法を守る生活においてカギとなるのは「愛」なのです。

しかしもう一つ心に留めるべきこととして、私たちはこの「愛」を高くあげるあまり、反対の極端に行き着かないように注意しなければなりません。すなわち愛の重要性を説くあまり、個々の戒めや律法を軽んじてはならないということです。パウロは「大事なものは愛だから、今や愛が律法に取って代わった」とか、「愛を中心に考えれば細かな律法はどうでも良い」とは言っていません。そうではなく、「愛は律法を全うする」。ここで律法は少しも退けられていません。むしろ愛は律法の線に沿って考えられ、実行されなければならないのです。「愛」という言葉をスローガンのように使っても、それだけでは中身が空っぽなのです。

時々、大事なものは愛だと言って、聖書の様々な教えや戒めをより低次元のことにように扱い、軽んじる人がいます。おそらくその人は「愛」を何かセンチメンタルなこと、思わず涙が出そうになること、感動的なことといったイメージで考えているのでしょう。そして「私は愛が大事だと思う」と言いながら、平気で律法に反する行動を取る。たとえばここに「殺してはならない」という御言葉があります。これは人を実際に刀などで殺すだけではなく、言葉で人を馬鹿にしたり、ののしったりすることも含むとイエス様は言われました。このような悪い言葉、人の悪口などを平気で口から出しながら、一方で「私は愛が大事だと思う。愛がキリスト教の中心である」と主張する。それは矛盾しているということです。愛は律法を全うするのです。あるいは「盗むな」という戒めがここに上げられています。これは実際に何か物を盗むこともそうですが、他にも色々適用されるべきことがあります。たとえば約束の時間を守らないことも盗みです。それは相手の時間を無駄に奪うことであり、盗みなのです。あるいは先に見たように、何かを借りたまま放置することも一種の盗みです。このような事柄に無頓着でいながら、「私は愛が大事だと思う。私は愛こそを大事にして生きている」とは言えないということです。愛は戒めを守り行なうことに現れなければならないのです。

注目に値することは律法には否定形のものが多いことです。9節であげられている十戒の戒めも、どれも否定形です。「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」。そしてこれらを守ることが隣人を愛することだと言われています。ですから何かすごいことをすることが愛することなのではないのです。人を驚かせ、感動させることをすることが愛ではなく、むしろ姦淫しないという戒めを守ることが隣人を愛することなのです。自

分が好きな相手だったら誰とでも自由に親密な関係になることが愛に生きることなのではなく、他者の結婚生活や家庭生活を破壊しないように、姦淫しないことによって私たちは隣人を愛するのです。あるいは人を殺さないことが相手を愛することです。ひどい言葉で相手を傷つけず、むしろその人格を尊重して関わるのが愛することなのです。あるいは人のものを盗まないことによって、私たちは相手を愛するのです。相手の持ち物は相手のものとして尊重すること、借りたものは適切に速やかに返すことが、相手を愛するということなのです。また人のものをむさぼらないこと、妬まないこと、自分に与えられた状況に満足して生きることによって、周りの人々を愛することができるのです。ですから10節に「愛は隣人に対して害を与えません。」とあります。何か目立つような感動的なことをしても、人に害を与えているようでは、隣人を愛しているとは言えません。律法によれば、一見地味に見える戒めを一つ一つその精神に沿って守ることによって、私たちは隣人を真に愛する歩みを実践できるのです。ですから私たちは、自分はまだ愛とは何であるかが分かっているなどとは思わずに、聖書の戒め一つ一つに良く耳を傾けるべきです。そしてそこに隣人を愛するとはどういうことかを具体的に教えられ、その実践を通して、律法を全うする歩みへ進んで行くのです。

私たちは今日のパウロの言葉を通して新しい視点を持ちたいと思います。すなわち私たちは周りの人すべてに愛の負債を負っている者です。周りの人たちに愛を返して行くべき者です。そのように生きることが、神が喜んでお受け入れくださる神への礼拝生活です。これは私たちの生まれながらの力では不可能なことでしたが、今や聖霊の力に生かされている者として、その取り組みが可能なる者にされています。またこうして律法の要求が私たちの内に全うされることが、私たちが真の意味で救われるということです。律法は神が示されたものであり、神ご自身の性質を反映する鏡です。ですからこの律法に従って歩むことは、神のかたちに造られた私たちが、益々神に似る者となっていくことなのです。私たちは神の愛に感謝し、神への礼拝生活として、今日の御言葉に取り組みたいと思います。これは単なる義務ではなく、私たちの感謝を神に現わすための道です。神の愛にお答えするための道です。この道を進んで、私たちの内に律法が全うされ、益々神に似た者とされるといふ救いの道を最後まで進んで行く者へ導かれたいと思います。